
クール=ビューティー

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

クール＝ビューティー

【Nコード】

N7624B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

如何にも都会風のクールな美女長野さん。ところがふとかかつかきた電話で彼女の地が出てしまい。澄ました女性の素顔のお話です。

第一章

クールビューティー

長野沙代子は目鼻立ちの整った美人である。黒い髪を程よい長さで奇麗に纏めいつも服装や化粧にも気を使っている。会社でもできる人間であり他の人間にとっては高嶺の花であった。

ただあまりにも美人で落ち着いた性格の為声をかける人間はいなかった。あまりにもランクが高いとどうしても声をかける人間がいなくなってしまうのは何処にでもあることである。

男子社員も女子社員も声をかけることはない。バイトですらそうである。彼女は社内では孤高の存在であり誰もが一目置く、そんな女性であった。

ある日のことである。急に仕事が入った。

「ああ、長野君」

部長が彼女にそれを頼んだ。

「急な仕事だがいいかね」

「はい」

沙代子は特に顔を変えることなくそれに応えた。

「わかりました」

「かなり難しい仕事でね」

部長はその顔まで難しいものにしてさらに言う。白いものが増えてきている髪の毛がやけに目立つが何処と無く若々しい顔にその苦味が及んでいた。

「時間もかなりかかると思うが」

「何時までに終わらせればいいですか」

「今週中だ」

部長はそう答えた。

「いいかね」

「はい、それでは」

沙代子は相変わらず落ち着いた声で応える。そしてさらに尋ねてきた。

「どういったものか見せて欲しいのですが」

「うん、これだよ」

部長はそれに応えて一冊の薄いファイルを出してきた。それを沙代子に手渡す。

「これですか」

「そうだ」

ファイルを受け取った沙代子に述べる。

「そのファイルにあるものをだね。纏めて欲しいんだ」

「そうなのですか」

「うん、要するに説明書にしてもらいたい」

部長は言う。

「細かくね。できるかね」

「そうですね」

沙代子は部長の話とファイルの中を比較しながら言葉を返してきた。

「今週中ですよね」

「うん、できるかな」

「任せて下さい」

また返って来た沙代子の言葉は頼もしいものであった。だが何処か冷たく人間味が乏しいものであった。

そうした冷たさが彼女を何処か馴染めないものにさせていた。だが彼女自身もそれをどうこうするわけではなくそれはそのままであった。結果として彼女は高嶺の花で孤立した存在になってしまっていた。

しかしである。人というものは時として仮面を被っているものである。彼女もまた然りであった。それがわかったのはふとしたはずみからであった。

ある日のことである。会社に電話がかかってきた。

「長野さん」

「はい」

沙代子はいつものクールな物腰と声でそれに応えた。制服の着こなしも見事でやはり隙がない。

「電話です」

「誰からですか？」

やはり冷たい声であった。奇麗だが無機質で機械的な声である。それを聞くとやはりこの人は近寄り難い人だと、そういう印象を他の者に与える声であった。

「御親戚からです」

「親戚」

沙代子はそれを聞いてほんの一瞬だが微かに動きが止まった。だがそれは誰にも感じさせなかった。それ程までに一瞬で微かなものだったからだ。

「はい、どうぞされますか」

「お願いします」

つないでくれと言った。それを受けて電話は彼女の側の受話器につなげられた。

「はい」

いつものクールな動作で対応をはじめ。ところが。

「おばちゃん!？」

「えっ」

「おばちゃん!？」

沙代子が急に俗な言葉を口にしたので周りの者は目を点にさせて彼女の方を見た。

「どげんしたとよ。いきなりこんなとこに電話して」

「どげんって」

「今のは」

「ああ、間違いないよな」

彼等は口々に囁く。今彼女が九州弁を口にしたのをはつきりと聞

いたからだ。

「だからいきなりそんなこと言われても困るったい。そんなしえからしかこと」

「どうやら何か込み入った話をしちえるらしい。声もやけに感情的で顔も困惑したものであった。」

「それにうちその話もう断ったとお？なしてまた持つてくるんたい」九州弁で話を続ける。周りには全く目を向けず話をしている。

「えっ、もう場所まで決めたとお！？待ちんしゃいよ。うちはそれ」

よく聞けば電話の向こうからも九州弁が聞こえてくる。中年のおばさんの声だ。どうもその九州弁がやけに様になっている声であった。

「で、どうしてこ来いつてか。母ちゃんも知つとる？なしてそういつも勝手に」

声がいよいよ困り果てたものになっていた。表情も観念したものになっていた。

「ああ、もうわかったたい。ほなその日たいね」

「そう言つて電話を切つた。慥然として最後に呟いた。」

「本つ当に。いつも強引ばい、おばちゃんは」

「あの」

カリカリしている沙代子に若いOLがおずおずと声をかけてきた。周りの者はそれに注目している。

「長野……さん？」

「あつ、はい」

沙代子はここでやっと自分が取り返しのつかないミスをしてしまったことに気付いた。それで観念した顔で彼女の話を受けたのであった。

「はい、そうです」

彼女は酒の場で自分のことを同僚達で話していた。会社の最寄の駅のチェーン店の居酒屋であった。そのジョッキと枝豆を飲みな

クール=ビューティー

がら話をしている。

第二章

「私、生まれは九州の博多です」

「そうですか」

「やっぱり」

「はい」

小さくなってこくりと頷く。

「高校までずっとそれで。大学はこつちで」

「それで九州弁は何でまた隠していたんですか？」

「そうですよ。私だって新潟の生まれで」

オフィスで沙代子に声をかけた新人の女の子が言う。小柄で可愛らしい感じの娘だ。名前を久保敦子という。

「別に。ねえ」

「けれど」

それでも彼女は言う。

「こつちは凄く垢抜けていて。それで」

「隠したんですか」

「ええ」

ビールをちびりと飲みながらこくりと頷く。そこにはいつもの冷静で知的な様子は何処にもなく小さくなっているのがよくわかった。

「何かねえ」

背広の中年の男が腕を組んで述べた。

「意外だよね」

「そつだよな」

それに同じ位の歳の髭の剃り跡が青々とした男が頷いた。どうやら元々は髭がかなり濃い男であるらしい。それがやけに目立っている。

「九州生まれなんだよね」

「それでそんなに隠すなんて」

やはり九州生まれというのは何か特別な認識を持たれている。どうしても開けっぴろげで堂々と方言を言うような、そんなイメージがあるのだ。これは関西人も同じように思われているが。

「それって人それぞれですよ」

新潟生まれの敦子がそう述べた。

「だって。シャイな人だっていますし」

「長野さんはそのシャイな人だったと」

「そういうことですよ」

「うっん」

「けれど何か」

意外だと認識せざるを得なかった。どうしても頭の中であのクールな沙代子と九州弁が合わないのだ。それに違和感を感じずにはいられなかった。

酒は飲んでいるが今一つ進まない。やはり話が話だからだ。

「別に隠すことはないじゃないですか」

敦子がまた言った。

「私だって隠していませんし」

「けれど」

それでも沙代子はまだ俯いていた。

「やっぱり私今のままで」

「今のままでいいんですよ」

ここで彼女が言ったことは以外であった。

「いいって？」

「だって長野さんは長野さんですから」

「こうも言った。」

「方言使ってもそれは変わりませんよ」

「そうかしら」

「だって。九州でも冷静な人はいますよね」

「ええ、まあ」

少し考えれば当然のことである。何処にも冷静な人間もいれば熱

くなりやすい人間もいる。九州人が誰もが豪放磊落なわけがないのだ。人には個性があるのだから。

「だからですよ」

敦子はさらに言う。

「そんなに方言とか気にすることはいいですよ。ほら、私だって」

「貴女だって？」

ふと敦子の目を見た。

「時々出ますから、新潟弁」

「そうなの」

「そうですね。関西の人なんてもっとじゃないですか」

「そうね」

会社にも関西人はいる。彼等はどうしても関西弁が出るのである。関東であっても関西弁がよく聞かれるのはこのせいである。とりわけ東京ドームでの阪神のゲームではそうである。

「ですから別に気にすることないですよ」

「じゃあ」

「はい」

敦子はにこりと微笑んできた。

「誰だって方言はありますから」

「そうだよな」

男達もそれに頷いてきた。

「俺はまあ神奈川生まれだけれどやっぱり」

「俺も千葉だけれど」

「ほら、同じなんですよ」

「九州でもそれは同じなのね」

「私はそう思いますよ」

敦子はにこりとした笑みのまま述べる。本当に優しい顔になっている。

「ですから」

「わかったわ」

クール=ビューティー

「ここまでできてやっと沙代子は頷くことができた。

「そうよね。誰だって」

「そうですよ。それどころか」

「それどころか？」

敦子の言葉に顔を向けた。その時漂ってきたつまみの焼き餅の匂いが何故か彼女をイメージさせた。それは彼女が新潟生まれだからであろうか。ふとそうしたイメージを感じたのである。

第三章

「何かかえっていいですよ」

「いいの？」

「ええ」

敦子は答える。

「だって。今までの長野さんて何処か近寄りにくくて」

「あつ、それはあるな」

「そうだな」

二人もそれに納得して頷く。

「何処かな」

「冷たい感じがしてな」

「それが急に変わった感じがするんですよ」

「方言だけで？」

「そうですね。何か急に」

彼女は語る。

「人間味があるように感じられました。あつ」

言ったところでふと左手で口を押さえてしまった。

「すいません。こんなこと言ったら失礼ですよね」

「いえ、いいわ」

だが沙代子はそれをよしとした。

「けれど。そうなのね」

「はい、何か凄く親しみを感じたというか」

さらに言う。これは沙代子にとってかなり意外な言葉であった。

「可愛かったですよ」

「えっ」

沙代子はその言葉を聞いた時思わず目が点になってしまった。

「あの、今」

そして敦子に問う。問う声にも動揺が見られた。

「可愛いつて……私か？」

「はい」

敦子はそのにこりとした笑みのまままた答える。

「私はそう感じましたよ」

「そうなの」

何か呆然とさえしているという感じであった。それが周りの者に面白いようにわかる。

「何かね」

「はい」

そしてそれに応える。三人もそれを聞いている。

「そんなこと言われたのってあまりないから」

「そうなんですか」

「やっぱりね。こんなふうにな寄り難いつてイメージがあるから」

「それが消えちゃって」

敦子はまた言う。

「くだけていましたし」

「不思議ね」

その話を聞いているうちにどういうわけか沙代子も笑顔になってきた。微かに、少しずつだが確かに笑顔になってきていたのだ。それは自分でもわかった。

「言葉一つで」

「言葉って大事だからね」

「そうそう」

男二人がここで言った。

「九州弁ってさ、何か違うんだよ」

「そうなんですか」

この言葉もまた意外なものであった。思わず問うてしまった。

「そうなんだよな。そこにいたらわからないけれど」

「関西弁と同じで」

彼等はそう沙代子に対して言う。

「血が通っているんだよ」

「血が」

「そうということなんですよ」

敦子もまた言った。どういうわけか彼女の言葉がことさらに心に残る。それが凄く印象的なのである。

「沙代子さんって冷たい感じがしたんですよ。こう言つと本当に失礼なんですけれど」

「ええ」

何時しかビールも進んでいる。リラックスしてきた証拠だろうか。

「ジョッキね」

「はいよ」

男達がまた注文すると店の兄ちゃんが威勢のいい声をあげる。その声は何処か関西弁に近いニュアンスを持っていてどういうわけか人間味を感じさせた。

「それがあれで」

「変わったのかしら」

「はい、それもよく」

「そうだよな」

「むしろ意外」

男達は自分の手にあるジョッキを飲み干し烏賊の足の天麩羅を食べながら答えた。

「そこんところかさ」

「長野さんって凄い東京的なイメージがあつたんだよ」

「東京的……」

何かはじめて聞く言葉であつた。

「そう、東京」

「よく言えば合理的だけれど悪く言えば無機質だよな」

どうしても東京の一部分にはそうしたイメージがある。これは都会ならば何処でもあるものだが東京がそのイメージがとりわけ強いのは否定できないであろう。東京はそういう街なのだ。

「けれどね」

「ここで彼等は言う。」

「それがなくなつて」

「凄く人間的に感じられたよ」

「はあ」

「けれどですね」

敦子はジョッキを受け取りながら沙代子に言う。早速ガブガブと飲みはじめる。

「そんなに意識することはないですよ」

「言葉を？」

「そうですね。自然でいいんです」

「自然で」

また話がわからなくなつてきたのを感じた。

「ええ。自然に」

「話したいように話せばさ」

「それでいいんじゃないかな」

「そうですね」

また心が落ち着いてきているのを感じた。

「じゃあこれからは」

「はい」

敦子がにこりと笑つて答えてくれた。

「長野さんが好きなようにされたらいいですよ」

「そうですね。じゃあ」

「ここで全ては決まつた。」

「これからは。碎けていくわ」

「わかりました」

沙代子にはにこりと微笑む。それから沙代子は温かさを感じさせながらもしつかりとした女性になった。そしてそのもとなつたお見合いの話も上手くいった。ふと出てしまった方言が彼女の全てを変えてしまった。言葉一つで人の運命は変わってしまうものというこ

クール=ビューティー

とであるっか。

クール=ビューティー

完

2006.12.6

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7624b/>

クール=ビューティー

2009年6月23日10時33分発行